様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 2 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2005～2008
課題番号：17390592
研究課題名（和文）
痴呆症高齢者とその介護家族に対するグループケアを活用した相互支援プログラムの開発
研究課題名（英文）
Implementation of Comprehensive Care Program Designed to Support Elderly with Dementia, and Their Family Caregivers.

研究代表者
水谷　信子（MIZUTANI　NOBUKO）
兵庫県立大学・看護学部・教授
研究者番号：20167662

研究成果の概要：
地域で生活する認知症高齢者とその家族介護者にグループケアを活用した相互支援プログラムを開発・実施した結果、認知症高齢者が他者と互いの力を補いあうことや、認知症高齢者と家族が関係を再形成していく様子が新たに見いだされた。そして、認知症高齢者のこのような振る舞いが、家族介護者の認知症高齢者への多面的な理解につながっており、本プログラムは家族介護者が孤立することなく認知症高齢者と共に地域で暮らしていく契機になる介入プログラムとして期待できる。

＊厚生労働省の「痴呆」に関する用語変更の通達（2004 年 12 月）に伴い、本研究においても“痴呆症”を“認知症”と表記する。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	2,800,000	0	2,800,000
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	6,100,000	690,000	6,790,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：認知症、相互支援プログラム、アクティビティケア、介護教室、認知症介護

１．研究開始当初の背景

認知症看護研究の分野では、認知症高齢者に対する非薬物療法としての様々な認知症ケアの研究が進んでいる（Stern,2002、Basting,2002、河合,2003、野村ら,2005）。

また、介護者（介護家族）に対しては、介護負担に関する研究（今井,2004、高橋,2003）から看護・介護相談のシステム構築など、介護者支援を念頭にした取り組み（片山,2004）への移行が見られる。

研究者らは、2002 年から開始した大学併設の研究推進センターにおける「高齢者もの忘れ看護相談」での認知症介護相談と地域看護・介護職への認知症看護・介護教育の成果を報告し（平林ら,2004）、多様な生活障害を引き起こす認知症疾患に対しては、認知症高齢者とその介護家族の双方に相互的に介入する必要性を明らかにした。

そこで、認知症高齢者に対する看護介入プログラムとしての「認知症高齢者に対するグループアクティビティケア」と「認知症高齢者の介護者に対する教育・相談機能」の双方

を一本化した系統的プログラムの開発・実践が重要であると考え、認知症高齢者とその介護家族を支援する「認知症高齢者とその介護者に対するグループケアを活用した相互支援プログラムの開発」（以下、「相互支援プログラム」とする。）を目的とした研究を行う。

２．研究の目的

「認知症高齢者へのグループアクティビティケア」と「介護家族に対する相談及び教育・指導」を系統的にまとめた相互支援プログラムを開発することを目的とし、そのプログラム運営を通し、認知症高齢者とその介護者を相互支援する。

３．研究の方法

地域において「相互支援プログラム」を実施し、評価を行う。

（1）研究期間

2005 年 4 月～2008 年 3 月。

（2）研究方法

①医療機関により「認知症」の診断を受け、地域で家族と共に在宅生活を送る 65 歳以上の高齢者で、事前に研究の目的と倫理的配慮を伝え、研究協力の同意が得られた者の 1 グループと、その介護家族で事前に研究の目的と倫理的配慮を伝え、研究協力の同意が得られた者の 1 グループに対し、以下のプログラムを実施する（表 1）。

表 1 相互支援プログラム の内容

	認知症高齢者グループ	介護家族グループ
1 回	頭の体操 ～伝言ゲーム～	介護体験を語り合おう
2 回	足の体操 ～ﾌｯﾄﾎﾞｰﾘﾝｸﾞ～	認知症･疾患編/ 対応編
3 回	一緒に「もの作り体験」 ～押し花貼り絵に挑戦～	
4 回	健康管理を 考えてみよう	もの作り体験を 振り返る
5 回	年賀状の準備を しよう！	健康管理編/ 社会資源編
6 回	一緒に「物語りを作ろう！」 ～新たな力の発見～	
7 回	お楽しみ会	まとめ会

＊3 回目･6 回目は、認知症高齢者･介護家族同席

②認知症看護の専門家である研究者 1 名が運営者となり、セッションリーダーとして「相互支援プログラム」を実践する。その他、研究者 1～2 名が観察者となり、その場の状況を研究データとして収集する。毎回のプログラム施行後に、観察者となった研究者が運営者の言動の意図をインタビューし、記述データとして記録する。双方とも逐語録として書き起こした後に記述記録として整理し、質的・帰納法的分析を行う。

③研究データの妥当性については、スーパーバイザーによる指導を適宜受けるとともに、中間報告として、研究成果を A 町「認知症介護予防事業」のスタッフなど関係者に対して発表し、意見交換を行うことで確保する。

④また、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認を受けて実施する。

４．研究成果

（1）「相互支援プログラム」の実施

①実施プログラムの概要

「相互支援プログラム」とは、認知症高齢者 5～6 名を一グループとしたアクティビティケアと並行して、その介護家族グループに対して行う介護教育・介護相談である。

認知症グループ、介護家族グループへのセッションは、1 回 1 時間、計 7 回で行われ、そのうち 2 回は、両者が同じ場で、共に参加する形式で計画した。（表 1 参照）

今回は、ある地域の認知症高齢者リハビリ事業に乗り合わせる形で実施した。実施期間は 2006 年 11 月 6 日～12 月 21 日である。

②研究協力者の概要

研究協力者は、山間地域で生活する認知症高齢者 6 名（男性：2 名、女性：4 名、平均年齢：80.6 歳、MMSE14 点～25 点）と、その介護家族 6 名 （妻 2 名、夫 1 名、嫁 1 名、娘 2 名、平均年齢 69.3 歳）である。

認知症高齢者 6 名は、いずれも医療機関でアルツハイマー型認知症、脳血管性認知症との診断を受けているが、介護保険は未申請である早期段階の認知症高齢者であった。また、これら介護家族は、6 名ともこれまでに介護相談や介護教室に参加したことがなかった。

その他、認知症治療薬を服用していたのは 2 名であった。

③実践方法

研究協力者に相互支援プログラムを認知症看護の専門家である研究者が実践し、認知症高齢者グループへのセッションはビデオ録画 とフィールドノートで記録した。介護家族グループへのセッションは IC 録音とフィールドノートで記録した。介護家族データは逐語録に変換した後、質的帰納法的に分析を行った。また、結果の信憑性は、研究会議での討議により確保した。

（2）「相互支援プログラム」の結果

「相互支援プログラム」を実践し得られたデータから①各グループセッションで起きたこと＜高齢者グループセッション＞＜介護家族グループセッション＞＜共に参加するグループセッション＞および②各グループセッションでの運営者の意図＜高齢者グループセッション＞＜介護家族グループセッション＞＜共に参加するグループセッション＞について分析した結果を以下に述べる。

①各グループセッションで起きたこと

＜高齢者グループセッション＞

認知症高齢者へのアクティビティケアを取り入れたグループセッションにおいて、フィールドノートに記録された高齢者の言葉・様子をデータとして、第1回、第2回のセッションと、介護家族と共に参加する第3回セッションを実施した後の第4回、第5回のセッションとに分けて、“認知症高齢者に起きたこと”を分析した。その結果、共に参加するセッションの前後で認知症高齢者に変化が起きていることが明らかになった。

前半セッションでは3つのカテゴリーと9つの中カテゴリーが形成され（表2)、後半セッションでは3つのカテゴリーと12の中カテゴリーが形成された（表3)。

表2 前半セッションにおいて認知症高齢者に起きたこと

カテゴリー	中カテゴリー
セッションへの取り組み方	主体的に取り組む
	集中して参加する
自己の表出	促されると言葉が引き出される
	湧き上がる自然な感情を表現する
	できることを一人で喜ぶ
他者との関わり	周囲を楽しませる言動をする
	仲間を意識して気遣う
	自主的に手伝いをする
	他者と協調できない

表3 後半セッションにおいて認知症高齢者に起きたこと

カテゴリー	中カテゴリー
セッションへの取り組み方	与えられたきっかけを作って考えを引き出す
	積極的･主体的に取り組む
	集中して参加する
自己の表出と内容	湧き上がる自然な感情を表現する
	恥じらいを感じながらも皆に自己を表現する
	意思表示をする
	うまくできない自分を意識している
他者との関わり	周囲を楽しませる言動をする
	仲間を意識して気遣う
	仲間に関心をむけ、他者を主役として立てながら楽しむ
	協調的な対話のキャッチボールができない
	運営者との対話で家族への思いを表現する

前半セッションと後半セッションのカテゴリー、中カテゴリーを比較すると、後半のセッションでは、前半のセッションと同様の事象に加え、どのカテゴリーにおいても望ましい変化が起こっていることを表す結果となった。

＜介護家族グループセッション＞

「相互支援プログラムに参加することで介護家族に起こったこと」を分析テーマとして質的帰納法的に分析した結果、7つのカテゴリーと19の中カテゴリーが形成された(表4)。

【表面的に現れる言動で認知症高齢者をみている】【家族として何とか介護を続けている】【内面変化や持てる力があることを実感する】【今はまだいけると判断して介護を続ける】【アンビバレントな思いに揺れる】の5つのカテゴリーは、従来の介護家族への相談・教育的介入研究にも見られている（水谷ら,2005)。共に参加するプログラムによって【内面変化や持てる力があることを実感する】という、日常生活では見出しにくい能力を、介護家族が実感を伴って理解できたことは本研究の上で有意義な結果になった。

さらに本プログラムの特性である、認知症高齢者と介護家族が共に参加する場面を持つことで、新たに【“人”として見つめ向き合う大切さに気付く】【家庭生活と対比させる】という2つのカテゴリーが形成されている。これは介護家族が認知症という疾患にとらわれず高齢者を見つめ、寄り添い関わろうとする能動的な行動を現していると考える。

介護家族は、認知症と診断されてから【家族として何とか介護を続けている】中で【表面的に現れる言動で認知症高齢者をみている】状態であったが、「相互支援プログラム」に参加し、認知症や認知症高齢者との関わり方についての情報提供や正しい知識を得ると共に、専門家と関わりながら少しずつ【“人”として見つめ向き合う大切さに気づく】ことができるようになっていっている。

表4 相互支援プログラムへの参加で介護家族に起きたこと

カテゴリー	中カテゴリー
表面的に現れる言動で認知症高齢者をみている	認知症という病気をみている
	できなくなった部分をみている
	できる部分も捉えている
家族として何とか介護を続けている	“大変”を抱えて何とか世話をする
	何とか介護とバランスをとって暮らしている
	摩擦を避ける対応をする
“人”として見つめ向き合う大切さに気付く	病前の面影が残っていることに気付く
	相手に添うことの大切さに気付く
	対等に会話することの大切さに気付く
家庭生活と対比させる	体験を共にしても日常との違いは感じない
	成果物を通して振り返ることで家族の関心が高まる
内面変化や持てる力があることを実感する	やりとりの中で変化を実感する
	今の能力を実感する
	気持ちが通じることを実感する
今はまだいけると判断して介護を続ける	今できるうちは自分や家族で介護する
	医師の言葉で認知症の状態をみている
アンビバレントな思いに揺れる	腹立たしく思う
	添おうとするがなじめない
	病前と比較してわりきれない思いを抱く

また、認知症高齢者と介護家族が共に参加する場面を持つことで【家庭生活と対比させ】、認知症高齢者の【内面変化や持てる力があることを実感する】ことができるようになり、客観的に自分たちの介護状況を見つめ、【今はまだいけると判断して介護を続ける】ことができるように変化していた。本プログラムに参加していく中で、介護家族が変化す

る状況を確認することができた。

以上のことから、相互支援プログラムが、介護家族が認知症高齢者の可能性を家族自身の目で確かめる機会をつくり、認知症高齢者と現状に見合った生活の再構築を支援するのに有意義な介入であることが確認できた。【“人”として見つめ向き合う大切さに気づく】という事象を通し、介護家族が認知症高齢者の可能性を自身の目で確かめることができ、認知症高齢者と現状に見合った生活を再構築できていた。認知症高齢者と家族の在宅生活を支援するためには【“人”として見つめ向き合う大切さに気づく】という事象を導けるようにプログラムを構成し、運営することが重要である。

＜共に参加するグループセッション＞

認知症高齢者と介護家族が共に参加する 2 回のセッションに認知症高齢者・介護家族が共に参加することのできた 5 組に起こったことを分析した結果、5 つのカテゴリーと 13 の中カテゴリーを形成することができた（表 5）。

表 5 認知症高齢者と介護家族が共に参加するセッションで起きたこと

カテゴリー	中カテゴリー
気にかけるが関わり合わない	気持ちを伝え合わない
	関わるタイミングの探りあい
	認知症高齢者の言動を気にする
	家族の存在を意識する
	高齢者より自分のことに集中する
衝突する	認知症高齢者のできない部分を受け入れられない
	お互いが主張してかみ合わない
運営者の介入で関係性が深まる	認知症高齢者の力を体感して嬉しい
	運営者の仲介で高齢者の力や家族の思いにお互いに気付く
	運営者の関わりを真似する
補う	認知症高齢者のできない部分を補足する
思いを通わせる	対等に向き合う
	気持ちが通じ合う

また、共に参加する 2 回のセッションに参加した 5 組の家族におきたことを分析した結果、家族によって関わり方に違いがあることや回数を重ねることにより生じる変化があることが明らかとなった。太田（1996）は「認知症高齢者のできることやわかることに固執すると、認知症高齢者は混乱し自己を低めてしまう」と述べている。本研究協力者の 5 家族は、場を共にしても認知症高齢者のできることやわかることに固執することはなく、高齢者が混乱し自己を低めることはなかった。これは、運営者が仲介役となり高齢者の力が引き出されたことや介護家族が安定した状態で高齢者を見守り補うことができたためと考えられる。しかし、各家族には相互作用のパターンがあるため、運営者が早い段階からアセスメントを行い、グループ全体と個人の関係も考慮しながら、両者の関係性に働きかけていくポイントを明確にし早期介入を行うことにより、両者の関係に摩擦が生じず、相互作用をよい方向に変化すると考える。つまり、各家族の好ましい相互作用のパターンを設定し介入することで、相互理解を促進し、住み慣れた地域で在宅介護を継続していくことにつながると考えられる。

②各グループセッションでの運営者の意図

＜高齢者グループセッション＞

第 1、2、4、5 回の高齢者セッションにおける運営者へのインタビューデータ及びフィールドノートを分析した結果、5 つのカテゴリーと 11 の中カテゴリーが形成された（表 6）。

表 6 高齢者セッションにおける運営者の意図

カテゴリー	中カテゴリー
たえず高齢者を捉える	変化しやすい高齢者の調子や力を個別にこまやかに捉える
	個と全体を捉える自分の動き方を意識する
グループ活動の中で人と関わり合う力をつける	運営者とのやり取りを通して対話する力をつける
	主体性と積極性を発揮する機会を作る
	仲間意識を持ち関わり合うよう意図的に間をつなぐ
課題を達成して楽しみや自信を得られるようにサポートする	高齢者が「できる」実感を持てるように関わる
	楽しみながらうまく取り組めるよう細かい調整や介入をする
疾患や加齢がもたらす障害を補って場を運営する	中核症状である記憶障害や行為実行障害を注意して補いながら進める
	認知症高齢者が集中できる場づくりをする
	身体面を把握して安全を重視した計画･運営をする
人としての関わり合いを持つ	人と人として心を通わせ関係性を作る

高齢者セッションでは、運営者は【たえず高齢者を捉える】【グループ活動の中で人と関わり合う力をつける】【課題を達成して楽しみや自信を得られるようにサポートする】【疾患や加齢がもたらす障害を補って場を運営する】【人としての関わり合いを持つ】という意図をもって運営していた。

運営者は、たえず意識して高齢者を観察することで、ゆらぎやすい認知症高齢者の調子や力を正確に把握することができ、それがその日その場の高齢者に合ったセッションを楽しく安全に運営する基盤となっていた。

また、セッションでは単にレクレーションとして楽しいというだけでなく、うまくできたことや活躍できたこと達成できたこと等が楽しみに繋がるよう運営者が個別性に配慮した細やかなサポートをしていた。このような運営者の関わりによって“できる”実感が積み重なり、認知症高齢者が失いがちな自信が回復していくと思われる。

その他、運営者は、疾患としての認知症の理解や加齢による心身の変化の理解に基づき、どこが難しくなるのかを予測して場を運

営していた。それにより高齢者にとっては過剰な負荷がかかることなく、混乱や危険を招かずに集中して楽しめる場になったと考える。運営者が認知症看護の専門家であることで、このような十分な配慮ができている。

また、対象者に寄り添って関係性を作った運営者がセッションを運営することは、場で起こることや高齢者に起こる変化にも影響を与えるのではないかと推察される。

＜介護家族グループセッション＞

介護家族セッションにおける運営者へのインタビューデータ及びフィールドノートを分析した結果、3 つのカテゴリーと 9 つの中カテゴリーを形成した（表 7）。

表 7 家族セッションにおける運営者の意図

カテゴリー	中カテゴリー
介護知識の向上	やりとりをしながら知識量を探り正しい情報を伝える
	知識･情報の提供と関心の度合いをすり合わせる
家族同士のグループ形成の促進	介護体験を自由に語れるような場作りをする
	グループの凝集性を高める
	個々の体験を共有して知識を広げる
	ネットワークを作ることをサポートする
介護者に合わせた介護スタイル形成の導き	目配り･気配りが重要であることを知らせる
	新たな捉え方と新たな関わり方を伝える
	自分の介護を考えられるようにサポートする

運営者は、【介護知識の向上】【家族同士のグループ形成の促進】【介護者に合わせた介護スタイル形成の導き】という意図をもって家族セッションを運営していた。

本研究において運営者は、認知症高齢者の現状に即した知識や予防的な知識の提供を対話形式で行うことにより、個々の状況に合わせた知識の向上に寄与していると考えられる。つまり、現状に即した知識の向上により、介護家族と認知症高齢者の生活に緊張が少なくなり両者の安定につながるといえる。

また、運営者が介護家族のグループ形成やグループの凝集性の向上のために介護家族同士の交流を促していた。これは介護家族が介護体験を共有することで、介護経験に意義を見出し、他者の体験から学ぶことや他者との相互作用により自己の介護の肯定感につながる。しかし、本研究においては、セッション中には十分なグループ形成には至らなかった。そのため、介護家族に起きた事象との関連性を検討し、より重点的に働きかける部分を検討する必要があると考える。

その他、運営者は介護家族の生活を考慮し抱え込まないことの重要性を伝えていくことで、生活の再構築が必要となったときに多くの選択肢の中から自分のスタイルを形成できるような基礎を作っているといえる。

また、認知症高齢者の多面的理解を導くことで、少しでも長く住み慣れた地域で生活が送れるような在宅生活継続の支援を行っていると考える。しかし、認知症という疾患と高齢者であることを考えると、セッション中だけでなくセッション終了後も、新たな問題が生じる可能性があることから継続的な支援が必要であると示唆される。つまり、意図的に関わったことが日常生活で活用されているのか、認知症の進行と加齢に伴う心身の変化に合っているのかを継続することが知識の向上とグループの凝集性の向上、介護スタイルの形成や在宅介護の継続につながる。

＜共に参加するグループセッション＞

第 3 回と第 6 回の共に参加するセッションにおける運営者へのインタビューデータ及びフィールドノートを分析した結果、セッション実践中の運営者の働きかけの意図として、3 つのカテゴリーと 9 つの中カテゴリーが形成された（表 8）。

表 8 共に参加するセッションにおける運営者の意図

カテゴリー	中カテゴリー
認知症高齢者と家族がグループ活動に取り組めるよう働きかける	ｸﾞﾙｰﾌﾟ活動を通して認知症高齢者の多面的な力を引き出す
	認知症高齢者と家族が共同作業に取り組めるようﾎﾟｲﾝﾄを見極めて関わる
	認知症高齢者と家族がｸﾞﾙｰﾌﾟ活動を楽しめるよう環境を整える
	個と全体の安全に対する細かい判断を重ねながら運営する
認知症高齢者と家族の関係性に働きかけて相互理解を促進する	家族が認知症高齢者のできる側面を体感できるよう場を演出する
	互いの存在の大切さを実感できるよう仲介役を果たす
	認知症高齢者と家族が互いの歩調を知り関わり合えるよう間をつないでｻﾎﾟｰﾄする
運営者も場に交わり、参加者の一員になりながら介入する	認知症高齢者と家族への理解を深め、ｾｯｼｮﾝの効果を日常生活に反映させる可能性をさぐる
	認知症高齢者、家族の両者と心を通わせる機会を持つ

共に参加するセッションでは、各認知症高齢者と介護家族が隣に座って作品を作っていくという課題作業に取り組む。運営者は【認知症高齢者と介護家族がグループ活動に取り組めるように働きかける】【認知症高齢者と家族の関係性に働きかけて相互理解を促進する】【運営者も場に交わり、参加者の一員になりながら介入する】という意図をもってセッションを運営していた。

また、運営者は認知症高齢者の持つ力を常にはかり引き出しながら家族との共同作業の難しい点を個々に判断して予測的に介入していた。その他、環境作りや安全性への配慮を重視する意識は、看護師としての専門性が発揮されていると考えられる。

本プログラムの特徴である「共に参加するセッション」は認知症高齢者と介護家族が関わり合う場であり、両者に直接働きかけることで関係性の変容や相互理解の促進に繋がると考える。しかし単に場を共にして課題を

仕上げるのではなく、認知症高齢者の力を家族に実感してもらい、逆に認知症高齢者が家族の助けを感じられるように運営者が場面づくりや声かけなどの細やかな働きかけを常に行っていた。普段共に生活をしている認知症高齢者と介護家族が、互いの存在を改めて意識し、日常生活では気付き難いプラス面の理解を促進するためには、このような意図的な運営が必要である。

また、運営者は司会進行の役割だけではなく、その場に入り込んで高齢者や家族個々と向き合い、人としての関係性を築く関わりを実践していた。このような関係性があるからこそ認知症高齢者は安心して楽しむことができ、家族も運営者を信頼してセッションや講義に参加するモチベーションを高めることに繋がっていたのではないかと考える。しかし、運営者として関係性を築くためには、ただ“親しく”なるのではなく、認知症を疾患として理解し、コミュニケーション技術を持ち、認知症を抱える家族の苦悩を理解している必要がある。このように専門性を持った運営者が場に溶け込み、認知症高齢者や家族と相互作用をおこす存在であることで、プログラムの目的である関係性や相互理解の変容に繋がる運営ができると考える。

（3）限界および今後の課題

まず限界として、本研究が山間地域で実践・データ収集を行っていることあげられる。今後、都市部においても実践しデータ収集を重ね、今回の結果の検証と、さらにプログラム内容及び運営方法についての精錬化が必要である。また、今回の質的データの結果を踏まえ、定量的なアウトカム評価方法について既存の効果指標を見直し、新たな定量的な評価方法を検討し、本プログラムの効果を検証することが重要な課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①高見美保, 水谷信子, 松岡千代, 川口幸絵, 久米真代：「高齢者もの忘れ看護相談」の新たな展開－認知症高齢者と介護家族に対するグループケアプログラムを実践して－, 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, Vol.2, 109-110, 平成 19 年（2007）, 査読なし.

〔学会発表〕（計４件）

①久米真代, 高見美保, 川口幸絵, 水谷信子, 石橋信江, 松岡千代, 高山成子：認知症高齢者とその介護者に対するグループケアを活用した相互支援プログラム－認知症看護の専門家が家族セッション中に意図したこと－, 日本老年看護学会第 13 回学術集会, 2008 年 11 月 9 日, 金沢市.

②川口幸絵, 高見美保, 久米真代, 水谷信子, 石橋信江, 松岡千代, 高山成子：認知症高齢者とその介護者に対するグループケアを活用した相互支援プログラム－認知症看護の専門家が共に参加するセッション中に意図したこと－, 日本老年看護学会第 13 回学術集会, 2008 年 11 月 9 日, 金沢市.

③Miho Takami , Nobuko Mizutani, Yukie Kawaguti, Kume Masayo, Nobue Ishibashi, Chiyo Matuoka, Sigeko Takayama : Implementation of Comprehensive Care Program Designed to Support Elderly with Dementia, and Their Family Caregivers. The 11th East Asian Forum of Nursing Scholars. 2008.2.28, 台湾.

④高見美保, 水谷信子, 川口幸絵, 久米真代, 石橋信江, 松岡千代, 高山成子：認知症高齢者とその介護者に対するグループケアを活用した相互支援プログラム－共に参加するプログラムで介護家族に起きた事象－, 日本老年看護学会第 12 回学術集会, 2007 年 11 月 10 日, 神戸市.

６．研究組織

(1)研究代表者

水谷　信子（MIZUTANI NOBUKO）
兵庫県立大学・看護学部・教授
研究者番号：20167662

(2)研究分担者

高見　美保（TAKAMI MIHO）
兵庫県立大学・看護学部・助手
研究者番号：10347536
（2005・2006 年度）

川口　幸絵（KAWAGUTI YUKIE）
兵庫県立大学・看護学部・助手
研究者番号：50405370
（2005~2007 年度）

松岡　千代（MATUOKA　CHIYO）
兵庫県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：20167662

高山　成子（TAKAYAMA　SIGEKO）
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号：30163322

久米　真代（KUME　MASAYO）
兵庫県立大学・看護学部・助教
研究者番号：70438266

石橋　信江（ISHIBASHI　NOBUE）
兵庫県立大学・看護学部・助教
研究者番号：50453155

（3）研究協力者

高見　美保（TAKAMI MIHO）
兵庫県立大学大学院・看護学研究科博士後期課程
（2007・2008 年度）

川口　幸絵（KAWAGUTI YUKIE）
元兵庫県立大学・看護学部・助手
（2008 年度）

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書